第7回館長講座　『編年学派とミネルヴァ論争　山内清男をめぐって』

司会：お時間となりましたので，第7回館長講座『編年学派とミネルヴァ論争』と題しまして，当館の鷹野館長よりお話をいただきます。鷹野館長，よろしくお願いいたします。

館長：皆さん，こんにちは。今日は，戦前の研究の山と言ってよいと思うんですけれども，「ミネルヴァ論争」という有名な論争を取り上げます。

こういう研究史を振り返るということになりますと，どうしても，スライドが文字ばかりになってしまいまして，何とか絵を散りばめようと思ったんですが，なかなかそうはいかなかったので，退屈なスライドになるかと思いますが，お許しください。

大正時代の後半から昭和の初めにかけて，縄紋土器の型式分類，そして編年研究，編年というのは年代分けのことですが，それらに積極的な活動をしていたのが，甲野勇（こうのいさむ）・八幡（やわた）一郎・山内清男（やまのうちすがお）という人たちです。この3人を総称して「編年学派3人衆」と言ったりもしました。

中でも，現在行われているというか，我々が採用している縄紋土器の年代の編年の大枠を定めたのが，山内清男です。

山内の前に，今申し上げました「編年学派3人衆」と呼ばれた人たちの他のお二人について紹介しておきます。

まず，甲野勇です。この方は1901年，東京生まれです。東京帝国大学理学部人類学教室の撰科生（せんかせい）となっているのですが，この撰科生というのは，今は全く無い制度でして，昔，帝国大学に入るというと，大体，その前に高等学校に入り，それから大学という道筋だったと思うんですけれども，どうも撰科生というのは高等学校をパスしている人たちのようで，卒業しても，学士というか，そういうものではなかったようです。

後でお話しする八幡一郎，それから，山内清男，お三方とも，この撰科生として大学で学んでおります。甲野勇は，大学を終わってから1926年に大山史前学研究所（しぜんがく）というところの所員となっています。この大山史前学研究所は，以前お話ししましたけれども，大山柏（かしわ）という大山巌（いわお）元帥の息子の方が作った研究所です。

甲野勇は，戦後は慶応大学，それから国立（くにたち）音楽大学で教授をされていました。国立音楽大学では文化人類学の担当だったと聞いております。東京帝国大学の撰科生の頃，それから大山史前学研究所の所員の頃の，関東各地の貝塚の調査と土器の検討を通じまして，甲野勇も型式学的な編年の枠を作っております。

甲野の一つの成果として，大山史前学研究所の紀要であります『史前学雑誌』に「関東地方における縄紋式石器時代文化の変遷」と題する論文を書かれております。

この中では縄紋土器を8群12型式に分けて記述しています。

第一群が，子母口（しぼくち）式と茅山（かやま）式。子母口式は川崎市にある子母口貝塚からの土器です。

第二群が，花積下層式。

第三群が，蓮田式。これは関山式とも言っています。

第四群が，広義の諸磯式で，胎土に繊維を含むもの。黒浜式という呼び方もします。

それから，第五群が，諸磯式。この諸磯式については，前回，編年土器の研究の進展の中で取り上げております。

第六群に阿玉台式・勝坂式・加曽利Ｅ式。大体，鳥居龍蔵が言っていた厚手式に相当するところのものです。

第七群に堀之内式。これは千葉県の市川市にある堀之内貝塚を標識遺跡とするものです。

それから，第八群が加曽利Ｂ式・大森式・それから安行式。埼玉県の川口市に安行という地名があります。そこにたくさん貝塚があるので，そこからの名称です。

このように分けまして，これらを貝塚から推測される当時の海岸線，汀線の移動による関係，それから個々の遺跡における層位的な関係，上下関係，それらから見て，各遺跡における型式の組合せを検討しました結果，第一群から第八群，つまり，４ページから５ページの，この写真でいうと，上から下へ向かって変化を遂げているとします。

その変化の方向性を，一つは単純から精巧へ，それから素朴なものから洗練されたものへというような方向を見出します。

さらに，これらを三期に大別していまして，前期・中期・後期という分け方ですが，一群から五群までを前期と括り，六群を中期とし，七群と八群を後期とわりふることを提唱しています。

具体的に，どんな土器かと言いますと，４ページの左上の写真が子母口式の土器です。非常に単純な形をしていまして，口縁部のところにちょっと紋様が付いています。

それから，真ん中が茅山式ですが，これは茅山式の中でも茅山下層式と呼ばれるものです。後で出て来ますが，ついでに話してしまうと，下のほうに横に筋が見えるのが，お分かりになりますでしょうか。ちょっと見えにくいんですが，これは貝殻で付けた跡なんです。貝殻条痕紋といいます。茅山式あたりまでは，貝殻条痕はたくさん使われます。

それから，上の右側が花積下層式で，これは全体が縄紋で覆われているんですが，こういう矢羽状につけられた，こういうのを羽状縄紋，羽の様子の縄紋というんですが，この羽状縄紋が盛んに使われる時期でもあります。

左下は，関山式で紋様がいろいろ付いています。実測図を作るにはやっかいな土器です。
下の真ん中は，広義の諸磯式で黒浜式です。写真を撮る時に失敗したのですが，これは紋様を付ける時に縄を転がすのですが，転がす縄にちょっと工夫をしている土器です。それから，右下が諸磯式です。諸磯式でも後のほうのものです。

次の５ページの左上は，阿玉台式土器で，この土器ではよく分からないんですけれども，実は土をこねる時に土の中に雲母を混ぜるんです。雲母を混ぜて焼くんです。そうすると焼かれた雲母というのは酸化して金色になるんです。多くの阿玉台式にはこのせいで表面がキラキラ光る装飾があります。
それから，上の真ん中が勝坂式。これは角度が悪いのですが，いちばんてっぺんにこちらを向いている蛇の頭が付いています。

上の右側が，加曽利Ｅ式です。それから，下の左側が堀之内式で，真ん中が大森式とも言っていた加曽利Ｂ式。こちら側の土器が安行式です。安行式でもその前半の土器です。

こんな変遷です。だからどうでしょう，甲野勇の言うところの，単純から精巧へ，素朴から洗練へ，言われてみると，たしかにそういう傾向はあるなと思います。

次に，八幡一郎ですが，こういう研究史の話をしたり物を書いたりするときには，そこに出てくる人の名前は，今，私も呼び捨てにしていますけれども，大体そうなんですけれども，この八幡先生だけは，私は，学生の時に直接教わったことはありませんが，八幡先生のもとで発掘をしたことがありまして，もう亡くなっていますが，八幡一郎と呼び捨てになかなかできないんです。八幡先生と，つい言ってしまうんです。

八幡先生は，1902 年に長野県生まれです。甲野と同じく，東京帝国大学理学部人類学教室の撰科生となられて，戦後，東京国立博物館の考古課長，その後，東京大学文学部考古学教室の講師をされました。次にお話しする山内清男も，講師という肩書で東京大学を終わるんですけれども，これはやはり撰科生ということで，学士という学位を持っていなかったということが多分関係しているんだろうと思います。東大を定年になられた後は，東京教育大学の教授，それから上智大学でも教鞭を取られました。

この上智大学の教授の頃に，八幡先生の発掘に参加させてもらいました。

・

八幡先生の研究成果ですが，岩波書店が 1935 年に出しました『日本民族』という本の中に「日本石器時代文化」という題名の論文を書かれています。

ちなみに，この『日本民族』という本なのですが，いろいろな方の論文が集められていまして，すごいものなんですが，例えば，人類学者の松村瞭（りょう）の「日本民族の研究」，それから，同じく人類学者の清野謙次の，京大の先生ですが，「日本石器時代人種論の変遷」，それから，題名だけ読むと「血液型より見たる日本人」，「朝鮮人と日本人との体質比較」，「日本人と南洋人」，「社会学上より見たる日本民族」とか，中には「記」「紀」，古事記と日本書記です。「「記」「紀」の淤能碁呂島（おのごろじま）及び大八島国出現に関する土俗学的一見解」が，「日本石器時代文化」の中にあります。

考古学分野では，他に，梅原末治の「上代古墳の研究に就いて」，それから，浜田耕作の「朝鮮に於ける考古学的調査研究と日本考古学」， 原田淑人の「日本考古学と支那六朝時代の遺物」など，今から見ると，そうそうたる大家たちが書かれていたんですが，その中に載せられているものです。この八幡先生の論文の中で，日本各地を地域ごとに分けまして，関東・奥羽・中部・近畿・中国・四国・九州・北海道という地域に分けまして，書いています。

関東地方についてのものを，ここに紹介しているわけですけれども，縄紋土器の型式を年代順に並べています。

八幡先生は，甲野勇・山内清男の型式名と合わせて，紋様の名前による区分もしております。紋様の名称と型式の関係は，ここに書いたとおりで，これも上から下に向かって新しくなっていくというところですが，捺型紋系（おしがたもんけい）として三戸式，条痕紋系ということで子母口式・茅山式，それから，羽状縄紋系として花積下層式・蓮田式・黒浜式，爪形紋系として諸磯式・阿玉台式，隆線紋系として勝坂式・加曽利Ｅ式，それから，擦消縄紋系（すりけし）として堀之内式・加曽利Ｂ式，条線紋系として安行式と，紋様と型式をくっ付けています。

擦消縄紋系というのは，縄紋を施して線を引いて区画を作って，その区画からはみ出た縄紋を消すんです。擦り消す，そういうふうにして紋様を付けるものですから，　擦消縄紋と呼んでいます。

条線紋は，やたらたくさん線が引かれるという紋様，これ紋様といって良いのかどうか，それが特徴である土器ということです。

八幡先生も，甲野勇と同様に前期・中期・後期と三大別していまして，捺型紋系・条痕紋系・羽状縄紋系，この 3 つをまとめて前期，それから，爪形紋系と隆線紋系をまとめて中期，擦消縄紋系と条線紋系をまとめて後期と分けました。

甲野勇との違いは，諸磯式です。諸磯式と阿玉台式とをくっ付けて爪形紋系としており，それからを中期とするわけですが，甲野勇は諸磯式を前期としていました。この扱いがちょっと違うけれど，大筋は同じと言えます。

ここで，新しく出てきた型式名三戸（みと）式なんですが，完全な形の土器の写真が見付からなかったので，８ページの私が掘った土器で紹介します。千葉県の鶴塚遺跡というのは，成田空港の北にある遺跡でしたが，鶴塚という名前から分かるとおり古墳だったんです。ところが，この古墳の調査をしていましたら，墳丘の下のほうから縄紋土器が出てきまして，それらを紹介しました。

三戸式の特徴は，上のほうの写真にあるとおり，非常に細い線がたくさん引かれていまして，横の線，格子目，斜めの格子の線があります。こういう線，これを沈線（ちんせん）紋，沈む線と書いて，沈線紋と言うんですが，これが特徴なんです。

この下のほうは，左が写真で，右が拓本で，拓本に断面を示しましたけれども，断面に見られるように，三戸式の特徴というのは，口縁部が内そぎになっている，これが非常に大きな特徴だということです。三戸式のすぐ後に田戸（たど）下層式という型式の，同じように，沈線をたくさん引くのがあるんですが，それになりますと，こういう内反りではなく，外反りになるという変化があります。

この土器を発掘したのは，大学院生の時でしたが，実は一体何だろうかと，上の写真の土器は何となく分かりましたけれども，下の土器は全然見当が付かなくて，見たことがない土器だったので，これは指導教官でありました佐藤達夫先生のところに持って行きまして，恥ずかしながらと言いますか，まだ縄紋土器の顔をよく覚えていないものですから，教えを乞いに行きました。そうしたら，佐藤先生は，今言ったような口縁部のところの特徴，反りの特徴だとか，この紋様に使われている道具や器具，ここのところのギザギザ，これは貝殻を使っています，アカガイ，ヘリにギザギザのある貝です，そのへりを押し付けていくとこうやってギザギザの紋様になります。こうした特徴から三戸式だろうと判断してくださいました。

この土器を調査したのは1972年で，74年に土器の報告を出したのですけれども，三戸式という土器は，三戸遺跡，これは横須賀の近くの三浦半島にある三戸遺跡から命名されたものなんです。

その三浦半島のほうにしか見つかっていなかったんですが，これが利根川のある千葉県の北部のほうで見つかった。他では出ていないだろうかと，いろいろ探していましたら，木更津の近くの遺跡で三戸式が出土していることを見つけました。

三浦半島と木更津，海を隔てていますけど，ここで，はたと思いついたんですけれど，ここからは余談です。

源頼朝が，鎌倉で兵を挙げて，負けて逃げますよね。その時に三浦半島から木更津のほうに，上総国（かずさのくに）

に逃げて再起するんです，そういうことがありました。
それから，もう一つ，これは神話の中の話ですけれども，古事記に出てくる話で，ヤマトタケルノミコトが東国を征服して戦っている時に，やっぱり三浦半島から木更津のほうに渡っているんです。その時に，海の神様を馬鹿にしたものですから，海の神様が怒って，ヤマトタケルの乗った船を沈めようとした。この時に，有名なオトタチバナヒメが身を投げて許しを乞うて助かったという神話が残っていますが，そのことを，はたと思いだしまして，やっぱり，縄紋人にとって，海というのは，あまり障害じゃないんだなということを，その時に改めて思いました。
三浦半島と房総半島は，そんなに離れていませんから，このくらいの海の交通というのは，割合簡単だったんじゃないかと思った次第です。

ちなみに，この写真は，私が撮ったんですけれども，恥ずかしながらと言うか，今に至るまで，これよりいい写真を撮ったことがないんです。一生で一番よく撮れていた写真だと自負しているんですが，この時，何でうまく撮れたのかというと，もちろん自分一人で撮ったんじゃないんです。周りに，先輩たちがいまして，ああしろ，こうしろと，いろいろうるさいのが，ガンガン入って来て，しょうがないと，逐一言うことを聞いていたら，これが撮れたんです。先輩の言うことは聞くものだなと，今にして，つくづく思います。

その次は，山内清男ですが，明治35年の東京生まれです。八幡先生と同じ年生まれです。甲野・八幡と同じように，やはり東京帝国大学理学部人類学教室の撰科生となります。その後，1924年，大正13年に東北帝国大学の医学部解剖学教室の副手（ふくしゅ）となります。副手って，これも今は無い制度ですけれども，助手の手前のところです。そのうち助手になります。

この時，仙台の東北帝国大学に来たのは，また，後で説明しますけれども，人骨取集を目的とした発掘をさせようということで，呼ばれたようなんですが，結局，医学部の先生と合わなくて，約10年経って辞めてしまいます。

辞職して，上京ということなんですけれども，このとき何で食べていこうかということを考えて，自分で工夫した原稿用紙を印刷して，それを販売して生計を立てようということを目論んで辞めたんだそうです。そして，上京したんだそうです。採算がとれていたのかどうか知りませんけれども，しかし，餓死もせずに，ちゃんと生きて研究していましたので，何とかなっていたんでしょう。
そして，また，東京で無職の時代に「先史考古学会」という組織を立ち上げて，「先史考古学」という雑誌を発行していました。

山内清男は，東京の文京区の本郷にお宅があったそうですけれども，本郷のお宅には，階段がありまして，その土器を階段に並べていたそうです。下のものが古く，上のものが新しい。そのせいかどうか，山内清男の論文を読みますと，時々，何とかの「段階」と書くところを，何とかの「階段」と書いてあるんです。これは，そういうことも，影響があったのかも知れません。

戦後，東京大学理学部人類学教室講師になられて1962年に定年となられて，それから，成城大学に移られて，1970年の8月に亡くなりなした。

先程，申し上げましたけれども，私は全然接点がありませんで，私にとっても研究史上の方ですが，70年8月というのは，私自身が考古学をやろうと思って決心した年なんです。その年の夏に，山内清男が死んだという新聞記事を見まして，どうということもないんですけど，あぁ亡くなっちゃったんだな

という，ちょっとした感慨に浸った覚えがあります。

山内の仙台での10年間ですが，東北帝国大学に山内を招いたのは人類学者の長谷部言人（ごんじん）という方です。長谷部言人（ごとんど）というのかな，本当は。でも，人は偉くなると名前なんかは，音読みなんです，言人（ごんじん）。山内清男は，これは他に呼びようがないので山内清男（やまのうちすがお）と言っていますけれども。
その長谷部言人，貝塚を発掘して，人類学標本の収集をさせようということで助手としたようでしたけれども，山内自身は，人骨の収集ということよりも，もっぱら貝塚から出土する土器の研究をしていました。

東北帝国大学に在職中に，関東，それから東北の貝塚を発掘しまして，1㎡くらいの区画で，自分で掘るんですから。掘って出て来たものを，非常に細かく丹念に採集していくことをしていたようです。

同じく，東北帝国大学に，松本彦七郎という生物学者の方がおられましたけれども，山内はこの松本彦七郎の，古生物学のほうでは常識である層位学的な研究，上から出たものが新しく，下から出たものが古いという単純な原則です，そういうような影響を受けていました。

仙台湾の周辺というのは，東京湾と並んで，縄紋時代の貝塚が非常に多数存在しております。そのことも大きな刺激となっていったんでしょう。縄紋の技法，縄紋というのは，縄を転がすことによって付けられる紋様だということを発見したのも，仙台時代です。

だから，山内の考古学，言い換えますと，日本の先史考古学の輪郭と基礎というのは，まさに仙台における10年間に作られたと言っても，これは過言ではないでしょう。

山内清男の業績・仕事は，山内清男の最も忠実な弟子であった，また山内清男の研究方法というものを最も受け継いだと言われる佐藤達夫先生によってまとめられています。『日本考古学選集』というシリーズが築地書館から出されましたが，その中で佐藤先生が「学史上における山内清男の業績」を載せています。山内の仕事を，縄紋文化の研究，それから，弥生文化の研究・北方文化圏の研究，学史に関する研究，と項目を分けて挙げています。

下の３つは，ここでは関係ないので，直接は触れませんけれども，縄紋文化の研究ということについては，縄紋土器の細別と大別，つまり，今見て来たような縄紋の型式分類を進めていったということ。それから，そのことを通じて，縄紋土器の起源と終末を明らかにしようとしたこと。縄紋土器そのものの研究方法として，紋様帯系統論，そして，縄紋の技法の解明。この紋様帯系統論というのは難しくてよく分からなかった，私自身はそれが正直なところです。今でも，この紋様帯系統論についての研究を進めている人というのは，どうなんだろうか，あんまり見られないんじゃないかなと思います。それから４つ目，先史文化の民族学的考察。これは，食料のこととかについて。それから，縄紋文化の実年代。これも後で細かく詳しく触れることになると思います。佐藤先生はこれらをテーマとして挙げています。

ここから後は，山内の研究を細かく紹介していきます。仙台での10年間の後，今日のテーマのミネルヴァ論争に至るまでの経過についても見てみます。

昭和３年に書かれた「下総上本郷（しもうさかみほんごう）貝塚」について，これは松戸市にあります上本郷貝塚の発掘の報告でもあるんですけれども，その中で，昭和３年の頃までの編年研究の進み具合を簡単にまとめています。

「関東の土器型式に（一）繊維を含む土器型式，（二）繊維を含まない諸磯式，（三）「勝坂」または「阿

玉台」，（四）加曽利Ｅ，（五）堀之内，（六）加曽利Ｂ，（七）「安行」の年代的序列がある」と大まかに言っています。

さっきから，繊維ということが出てきていますけれど，これは，簡単に言いますと，草です。土器を作る時に，土器の，粘土の嵩を増やすために草を混ぜる，大きい土器を作る時に土器の軽量化をはかるということなどの目的のために，粘土に草を混ぜるということをしていました。その草を混ぜた土器を繊維土器，繊維を含む土器という言い方をしております。

この段階では，土器の粘土に草を混ぜるというのが，一番古いんだということを，ここでは紹介しているのですが，ちょっと前に戻りまして，この八幡先生のところで見ると，三戸式には，実は繊維は入っていなくて，子母口・茅山・花積下層・蓮田，この辺のところは，繊維が混ぜられている土器です。

そして，この昭和３年版で一番古いと考えた繊維を含んだ土器について，「関東北における繊維土器」という題で『史前学雑誌』に連載をしています。東北地方の円筒下層式土器，土管みたいな形のもの，円筒形の土器，その中に繊維を混ぜたものがあるということを見つけます。

そこのところから，関東・東北における繊維土器というのを想定していきます。そしてさらに，繊維土器以前の古い型式の追究に進んでいくわけです。

各地の遺跡の出土状況や層位の状況から，繊維土器を古い段階のものと新しい段階のものとまとめる，そして，古い段階の繊維土器には，繊維を含む土器には，先程紹介した条痕というのがある，そして，新しい段階のものには条痕が伴わないと言います。

子母口・茅山，これは，古い時代の繊維土器です。これには条痕があります。花積下層・蓮田・黒浜，これには繊維はありますけれども，条痕は施されておりません。

そして，次に，今度は東北地方の土器を見るわけですけれども，「所謂（いわゆる）亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」，これは『考古学』という雑誌に２回載せています。

これは，大正14年に岩手県の大洞貝塚の発掘調査をするんですが，その大洞貝塚出土の亀ヶ岡式土器を，大洞貝塚の発掘地点名を取って，大洞Ｂ式，大洞BC式，大洞C_1式，大洞C_2式，大洞Ａ式，大洞Ａ’式と６型式に紋様からも見ていきます。この順番に新しくなっていくんです。つまり，亀ヶ岡式でも，一番古い段階というのを大洞Ｂ式と編年します。

この細別を基準にしまして，関東や中部地方に分布する亀ヶ岡式土器，東北地方の亀ヶ岡式土器と同じものが，関東や中部にも出土する。それらについて，その系統をみて，関東・中部に出てくる亀ヶ岡式の編年的な位置付けというのをしていきます。その結果，中部地方以東の縄紋土器の終末というのが，時間的にあまり大きな差がないということを論証していきます。

この当時の「常識」というか，一般的な認識として，東日本の縄紋土器の終末期というのは，とても新しいのだと，後で出てきますが，鎌倉時代や室町時代だと言う人もいるくらいだったんですが，そうじゃないんだということを土器の出土状況からも見ていく。そういった「常識」を打破する論文であって，これが後でいうミネルヴァ論争というのに繋がっていきます。

『ドルメン』という雑誌に連載した「日本遠古（おんこ）之文化」，これは７回にわたって連載されますが，これは進められてきた土器型式の細別を基礎にして，先史文化の年代的な秩序づけを行っています。全体は，４章に分かれていまして，第１章 縄紋土器文化の真相，これは，縄紋文化の系統的な理解というのは，土器型式の細別を基礎として行っていくんだ，土器を細かく分類して分けていく，それの年代づけを行

っていくことを通じて，研究を進めるんだということ。

第２章が，縄紋土器の起源，これは，型式学的な研究に基づいて最古の土器を追及していこうとすること。

第３章は，縄紋土器の終末，これは，亀ヶ岡式土器を細別して，その編年を基準にして全国の縄紋文化の終末というのが，時期的に大差ない，ほとんど同じような時期に縄紋時代は終わっているんだ，ということを論じます。

第４章は，縄紋式以後について，弥生式ということで，弥生式の段階のいくつかの問題というのを論じたりしますが，特に北方地域，北海道の縄紋式・縄紋時代以降について述べています。簡単に言いますと，北海道は稲作がほとんど行われていませんので，弥生時代はないんです。その時代について，縄紋文化の伝統を引いた土器が継続するから，続縄紋文化と名付けて，さらに，その後，土器の特徴から，土器の表面を滑らかにすることをした土器が多い擦紋土器，擦紋時代といい，そしてもう一つ，オホーツク海沿岸にみられる土器の特徴などを捉えてオホーツク文化を見出すことを挙げていました。

次に「真福寺貝塚の再吟味」，これも『ドルメン』という雑誌ですけれども，埼玉県のさいたま市の岩槻区にあります真福寺貝塚の発掘の報告で，これは，先程新しい段階の土器と位置付けた安行式という型式について，この真福寺貝塚から出てきた土器を基にして，安行式を安行１式・安行２式・安行３式と３つの型式に細かく分けることを示しました。

さらに，型式的なというか，紋様の変遷ということをみていくと，どうも２式と３式の間に，もう一つの型式があるだろうということを述べています。これは後に，安行 3a 式とか３b 式とか呼ばれるようになっていきます。

従来は，この亀ヶ岡式と安行式，関東地方では安行式が一番新しいとされてきましたので，東北地方の亀ヶ岡式と関東地方の安行式というのは，ほぼ同じような時期にあるんだろうと考えられていたんですけれども，ここでは，亀ヶ岡式の前半，さっきの型式名で言うと，大洞 BC 式，C_1式というあたり，この辺までと安行式が一緒にあり，亀ヶ岡式の後半のものと安行式は一緒に存在しない。さらに，安行１式，安行式の中で一番古い段階のものとしたのは，亀ヶ岡式よりも前，つまり大洞 B 式よりも前に位置付けられるということを明らかにします。

つまり，関東地方の土器と，それから東北地方の土器の比較の上で，非常に重要な位置を占めた論文と言えます。これは縄紋時代の終わりのほうに関する所です。

もう一つ，「古式縄紋土器研究最近の情勢」，これも『ドルメン』という雑誌に書いていますが，これは，かなり広く日本列島全体というか，本州，それから九州・四国に広く分布する押型紋土器と呼ばれる土器についてです。

これは，丸い棒に彫刻をしまして，その棒を転がすんです。斜めのギザギザを刻んだ棒を転がすと山型の紋様ができます。それから斜めに格子みたいに刻んでいく，それを転がすと格子状の紋様，丸い棒をちょこっと削って窪みを付けていって，それを転がすと，楕円形のものができます。

この押型紋土器というのは，山形と格子と楕円が紋様の基本なんですけれども，これらが，要するに，やり方は同じだと，棒を削って転がすというやり方なので，紋様の付け方は同じなので，日本列島各地に出てくる押型紋土器というのは，同一の手法・共通の種類の紋様を持つということから，九州も東北地方も同じ系統に属する土器であると，同じ系統ということと同時に，紋様の付け方も同じなんですか

ら，同じような時期に作られたものであるということを主張していきます。

こういうような論文を発表した後，雑誌の『ミネルヴァ』での座談会が行われるわけです。縄紋時代の終末をめぐって喜田貞吉との「ミネルヴァ論争」というのが起きるわけです。その「ミネルヴァ論争」で実際に論争する前に，他の研究者たちはどんなことを言ったのかということについても，見てみようと思います。

その前に，簡単に，この「ドルメン」という雑誌なんですが，戦前の考古学，人類学，民俗学の碩学（せきがく）・大家から若手の研究者たちの筆のすさび，今でいうと，エッセイ的なもので構成されていた雑誌です。研究者たちが気楽に書いて寄せた一般向けに作られた雑誌です。これは，当時の大先生たちが，みんな「わしが一番じゃ」という人たちばかりだったので，お互いの交流があまりない，研究の交流がはかどらない，そういう状況に対して，そういった大先生たちも招いて気楽にしゃべってもらったり，気楽に書いてもらったりしようという，そんな雑誌を作ろうということで，岡茂雄が企画します。

この岡茂雄という人は，著名な編集者であり書店主，本屋さんでした。岡茂雄自身も東京帝国大学の人類学教室に撰科生として入っていて，鳥居龍蔵の下で学んでいたんですが，学問のほうには見切りをつけて，学問の普及ということに力を注いだといえます。1924 年に岡書院という本屋さんを作りまして，当時 30 歳だそうですけれども，著名な本をたくさん出しています。

岡は，まず京都帝国大学の浜田耕作に相談しまして，人類学者の清野謙次を呼んで話し合って，こんなのやりたいんだけどと話したら賛成されました。東京に帰って来て，東京の有力な学者を一人ずつ訪問していって，このようなものを作りたいと言ったら，予想外といって良い程，好感をもって受け入れられていきます。早速，2 冊分くらいの原稿がすぐに集まったそうで，1932 年に創刊号が出されました。ちなみに，原稿料ですが，これは採算的に払える状況ではないということで，ボランティアだったのでしょう。大家の先生たちが，楽しみながら書いてくれたというところもあったんだろうと思います。創刊号を作る後半のほうは，岡茂雄が，折から召集されまして，松本の部隊に入っていたんですが，そこから，印刷所に送られて出されたというようなことです。もったいないくらい原稿が集まったというようなことがあったそうです。

しかし，岡が出版界を離れた 1935 年にこの出版は途絶えてしまいます。『ドルメン』が終わった後，先程紹介しました甲野勇が『ドルメン』の方針に則って，今度は『ミネルヴァ』という雑誌を出すことになります。この『ミネルヴァ』も，あまり長続ききしませんで，1936 年に 10 号で終刊ということになりますが，『ミネルヴァ』の中で起きた論争がありました。

縄紋時代の終末をめぐって，他の研究者たちがどんなことを言っていたのか，です。まず甲野勇と八幡一郎の考えです。甲野は，『埼玉県柏崎村真福寺貝塚調査報告』，先程も出て来ました山内の真福寺貝塚の発掘報告の冊子があるんですけれども，その中で，真福寺貝塚で出土した香炉形土器，匂いを嗅ぐ香炉のような形をした透かしのある土器や，それから，浅鉢形の土器が，紋様や形態は東北地方の奥羽式，亀ヶ岡式土器と同じだと。けれども，亀ヶ岡式の香炉形土器に比べると製作が拙劣であるということから，これは東北地方で発達した奥羽文化つまり亀ヶ岡文化の影響を受けて模倣したものだと，そういう考え方をしました。

つぎに八幡一郎は，「奥羽文化南漸資料」という資料の報告をしました。これは模倣とかいうことでは

なくて，奥羽文化，つまり東北地方の亀ヶ岡文化が南に下がって来て，影響を及ぼして成立しているのが関東地方の文化だというような言い方をしています。

山内は「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」という論文の中では，先程言ったように，亀ヶ岡式を 6 型式に区分していまして，亀ヶ岡式土器自体に系統的な発展がある，関東や中部で発見される亀ヶ岡式土器またはそれに類似した土器というのは東北地方からもたらされたもの，搬入されたもの，あるいは搬入されたものを見ての模倣であるということで，亀ヶ岡式土器が東北地方にあった時代と同じ時代に関東地方にもちゃんと同じような時代の土器があるんだということを示すと言っています。だから，奥羽文化南漸というような一方向の影響とだけ解釈するのではないんだと。この論文の重要性は，前にも触れましたとおり，縄紋時代の終末というのが，日本列島の各地で大差ないということを明らかにした点にあります。

甲野・八幡・山内以外の人たちですが，國學院の大場磐雄（いわお）は「関東における奥羽薄手土器」という論文で，この甲野・八幡・山内の 3 人を，甲野については奥羽文化模倣説，八幡については奥羽文化南漸説，山内は同文化並行説というふうに一列に並べて批評しまして，「奥羽薄手式土器はだいたい関東において発生し，東北において完成の域に達した」といういわば北漸説と言いましょうか，つまり関東で発生して東北地方で花開いたという北漸説を唱えています。大場磐雄は，縄紋土器の使用者を「蝦夷その他」とし，「古伝説並びに歴史に反映する事実から…（中略）…東漸または北漸せるをもっとも妥当なりとし，この間接的証明から関東縄紋土器の北漸を考え」た，関東縄紋土器が北に移って行ったということを考えた，そういう発言をしています。

今日の観点から見ると全く見当違いなんですけれども，これはこの当時の一般常識では，ごく当たり前な考え方だと言っても良いのかも知れません。

他の人たち，喜田貞吉の「奥羽北部の石器時代文化における古代支那文化の影響について」という論文，これは，津軽の蝦夷は日本民族と交渉を開く前に中国文化の影響を受けていたと言いました。

それから，中谷治宇二郎（じうじろう），『日本石器時代提要』という非常に優れた概説書を作っているんですけれども，その中で，「金石併用期文化・古墳文化が縄紋文化に影響を与えた」と言います。金石併用期文化というのは，金属器も使い，石器も使う時期で，今はもうほとんど金石併用時代という言い方はしませんが，大体，弥生時代の後半くらいの時期です。古墳文化とこれが縄紋文化に影響を与えているんだという見解です。

それから，森本六爾（ろくじ）は「東日本の縄紋式時代における弥生式並びに祝部（いわいべ）式系文化の要素摘出の問題」，この題名そのものです。祝部式というのは今日にいう須恵器のことを大体いうんですけれども，弥生土器とか古墳時代の土器の名前を挙げて，弥生文化や古墳時代の文化が縄紋時代の文化の中に見られると。その他，喜田貞吉のものを幾つか紹介しますと，「石器時代遺蹟から宋銭と鉄の曲玉（まがたま）」，青森県下の縄紋時代の遺跡から鉄製の曲玉・鉄鏃，それから宋銭，宋というのは中国の宋の時代で元の前ですから，鎌倉時代の前くらいです，そのくらいの時期のお金，コインが出て来ている。それから，また，喜田貞吉「奥羽地方石器時代実年代の下限」では，今度は岩手県の縄紋の遺跡でやはり宋銭が出てきたというところから，縄紋時代の下限というのは鎌倉時代にまで下がるんだという主張をします。

こういうような議論の中で『ミネルヴァ』誌上での論争があるわけです。

この「ミネルヴァ論争」があった昭和11年，喜田貞吉65歳，山内は34歳です。喜田貞吉は，非常に有名な人ですので，ご存知の方も多いと思いますけれども，徳島県に生まれまして，東京帝国大学の国史学科を卒業し，1909年に「平城京の研究・法隆寺再建論争」という論文で文学博士になっています。この法隆寺再建論争というのは，現在の法隆寺がもともとのものではなくて，一遍，火災に遭っている，いや遭っていないということの論争がなされたことがありましたけれども，その時のことです。文部省で国定教科書の編纂にも従事していまして，小学校の歴史教科書に，南北朝時代の北朝と南朝を並べて書いていったんです。そのため，1911年に南朝が正統であるという立場から，非難されまして，休職処分となります。1913年から京都帝国大学に勤めまして，1920年に教授になっています。そして1923年に前年に設置されたばかりの東北帝国大学国史学研究室の講師となりまして，古代史・考古学を担当しています。東北帝国大学の国史学研究室の基礎を築いたといってよいでしょう。

この昭和11年当時と言ったら，当時の歴史学会の長老的な存在でありまして，その長老に立ち向かっていく山内清男の意気というのはどんなものだったのかなと思います。

「ミネルヴァ論争」，先程も言いましたように『ミネルヴァ』という雑誌は『ドルメン』を受け継いで，甲野勇が翰林（かんりん）書房という本屋さんを作って，ここで編集していました。『ドルメン』に引き続いて，考古学・人類学・民俗学に関して気軽に読める月刊誌を目指そうというものだったわけです。
その意義は，かなり重いものがあったんですけれども，その『ミネルヴァ』の創刊号に，後藤守一，山内清男，甲野勇，八幡一郎，江上波夫，この5人による座談会「日本石器時代文化の源流と下限を語る」という座談会が行われました。その記録が載ります。

『ミネルヴァ』という雑誌の表紙と目次なんですが，これは昭和61年に学生社から復刻版が出されまして，その復刻版の表紙です。当時のもの，そのまま復刻されました。ミネルヴァという戦いの神様なんですが，この目次の一番はじに「日本石器時代文化の源流と下限を語る」という座談会が掲載されています。

ここでのやり取りですが，まず，「日本に旧石器時代があったらうか」というテーマで始まりまして，いくつかのテーマで話をしていって「日本新石器時代の実年代」というテーマで白熱したわけです。このテーマの最後のほうで，山内が「縄文式の終末期の年代が地方的に非常な違いはないと思うが，それには反対があるらしい」と発言します。これを受けて後藤守一，この方は，戦後，明治大学の考古学研究室を主宰した方ですが，「縄文時代の終わりの時代には地方的に夫々違いがあると思う。…喜田先生の言われる鎌倉時代ということも地方によっては必ずしも無茶の議論じゃないと思う。…関東地方あたりでもメインストリートから離れてゐた所はかなり遅くまでこれを続けていたと思ふ。少なくとも古墳の末期にも地方によっては縄文土器が使われていたということは考えてもいいんじゃないかと思います」と喜田貞吉の縄紋時代終末観に同調する発言をしたわけです。

山内は「それは一寸うなづけないですね。東北の石器時代の縄紋時代末期即ち亀ヶ岡式に併存し，交渉を持ち得たものは，関西の弥生式でも古墳時代でもない。やはり縄文式，この時代の末期の縄文式であることになる。従って縄文式の終末は地方によって大差ないとみなければならないでしょう。」

このあと，後藤守一が，縄紋時代の遺跡から新しい時代のものとされていたヒスイだとか，あるいは石帯，石の帯，古墳時代のベルトのバックルのようなもの，そういう石などが出土したということを挙

げているわけですけれども，これらに対して，山内は「東北の縄紋式遺跡からは正規の発掘では出てきた例のないような奇妙なものが地方人士によって注意され，あるいは中央の老若の学者によって珍重されています。これは実にいかがわしいことだと思う。」「石器時代の遺跡から出たと称する怪しげな例はいくつ加えても結局怪しいものとして残るべきです。」

これらのいかがわしいこととか，怪しげな例を紹介したのは，喜田貞吉だったわけです。喜田貞吉は，こういうことを知り得る立場にあった。この頃，東北帝国大学の奥羽史料調査部というところに籍を置きまして，東北地方各地の石器時代の遺跡を訪ねて，調査をし，報告もしていたわけです。

喜田の名前を出して山内が批判をしたというわけではないのですが，これは喜田の言うことを批判したんだということは，すぐに見て取れます。

早速，喜田貞吉は反論します。『ミネルヴァ』の3月号に「日本石器時代の終末期について」という題で反論を寄せます。この中で，東北地方の各地で縄紋時代の遺跡から宋銭が出土する，そういう例をたくさん挙げます。また，鉄製品が発見される事実を挙げまして，東北地方の石器時代の下限が著しく下降するということを強調します。「関東時代においては普通の場合，石器時代の終末を奈良朝以後に置くべき」「平泉において彼の燦然たる京都文化が移入せられていた傍らに，それから約 20 里隔たった東方の山間においては引き続き亀ヶ岡式土器を製作使用する石器時代人が棲息していた」という年代観を述べました。つまり，源義経と縄紋時代人が共存していたということです。そして「それらはまさに事実なのである。何人もこの疑うべからざる事実の前には屈従しなければならぬ」「考古学は実物を捉(とら)えねば物が言えぬように思っている人が少なくないようであるが…実物をつかまえねば物が言えぬ考古学はさてさて不自由なものである。余輩は常識考古学を提唱したい。」と結びました。

もちろん，山内は黙っていません。次の号に「日本考古学の秩序」。まず，「日本考古学の秩序は正規なる学問的操作によって樹立され，維持されるべきであり，偏見または誤解による紊乱(びんらん)の排すべきを確信する。」と言いまして，喜田の常識考古学を一蹴するわけです。各地の縄紋式の末期の土器について述べていきまして，それぞれの交渉についても触れて，各地の縄紋土器の終末については大差ないということを詳細に述べています。

その中で，縄紋時代を早期・前期・中期・後期・晩期と区分することをしているんです。ここではまだあまり詳しく言っていないのですが，5期に区分するということを述べています。先程の亀ヶ岡式の土器の時代については晩期というところに入れています。

喜田が証拠としました宋銭や鉄器の伴出について，それらは「縄紋式に伴わざる文物」である。だから，それらが出土したということについては，疑問を持ちますと同時に，全く否定もしていきます。そして，この論文の最後のところで，「喜田博士は上記の如き例を集めて居るが，これは遂に意外な結論を生もうとして居る様に見受けられる。鉄器または古銭は縄紋式の各段階のものから発見せられて居る。是川（八戸市の是川遺跡）では前期または中期，久栗坂では後期，亀ヶ岡式では晩期の土器に伴って居る。」つまり鉄器や古銭が縄紋時代の前期や中期・後期・晩期各時代に伴って居る，と言われる。「同博士（喜田博士）は数年前漢代以前の支那文化が東北地方に波及する如く考えられ，鐸状土製品（釣鐘みたいな土製品），内反りの石刀，三脚土器等々を引き合いに出されて居る。このうち鐸状土製品は主として陸奥地方の堀之内式に伴出する。また内反り石刀は亀ヶ岡式の後半に見られるのである。この場合においても一

源の影響は各時期の土器に普く及んでいるのである。」つまり中国文化の影響というのが後期にも見られるし，晩期の後半にも見られる。「今仮にこのうちの亀ヶ岡式土器について博士の説の若干を加えてみると，これは西紀前（紀元前）二三世紀の支那文化の影響を受けると共に，今から数百年前の日本文化をも取り入れて居る。その存続年代は千年をもって推すべきであろう。この間，亀ヶ岡式は縄紋式の各時期の文化，弥生式，古墳時代，日本歴史時代と交渉を持ち，時にはその重囲を破って関東，関西の縄紋式末期からの影響を受け，場合によってはこの地方への進出をも可能とされて居るのである。かくの如き複雑多岐の文化関係が考えうるのであろうか。若しありとすれば誠に神業と称う他ない次第である。」つまり，亀ヶ岡文化は，時間を超越して地域を超越して，いろんなところと交渉を持ってしまうということを指摘します。

喜田貞吉も，まだまだ負けません。5 月号に『「あばた」も「えくぼ」「えくぼ」も「あばた」』という題名の論文。これは，あばたもえくぼに見えるし，えくぼもあばたに見える，見ようによって人は好き好きだよ，っていうことです。しかし，もはや山内を論破することはできないで，旧説を繰り返すだけですし，6 月号に「またも石器時代遺跡から宋銭の発見」ということで，今度は長野県の諏訪郡上の段遺跡から，宋銭が見つかったという「新事実」を紹介しています。

6 月号，同じ号に山内は「考古学の正道」，この前の題名が「考古学の秩序」だし，今度は正道，を寄せました。その冒頭に「エクボはあるべき位置を持つが，あばたの所在には秩序がない」と，これは喜田をからかっているわけです。

最後は，「喜田博士と僕との論争も同じく一つの挿話となり，後には強固な考古学の組織とこれを不断に進展せしめる科学的精神が発揚されれば幸いだと思ふ」と結んでいます。

ここでこの『ミネルヴァ』誌上における論争は終わります。縄紋時代の研究の方法，考古学研究の在り方というのが山内によって示されて，旧来の説にこだわる喜田の敗北という結果となってしまったわけですが，決して，喜田と山内は仲が悪かったということはないんです。これはあくまでも学問的な意見の対立ということでした。

この後，ますます縄紋時代の土器を通じての研究が進むわけです。このように，山内が，歴史学の大家であった喜田と真正面から渡り合えたというのは，やはり，山内が行ってきた考古学に導入された層位学を基礎にした型式学を加えながらの非常に精緻な観察と分析に裏付けられている自信があったのだろうということだと思います。

この論争，喜田の立場というのは，主として文献を資料とする歴史学，文献史学という言い方をしましょうか，それと人類の行為や行動に基づいた物質的資料を基礎にして研究する考古学との間の論争だったという見方もでき，さらに，考古学が文献史学の補助学という従来の地位から独立していったという記念すべき論争だという評価もされます。

しかし，戦後になっても，まだ喜田と同様の考え方をする考古学研究者はおりました。今はいないと思うんですが，1960 年代くらいまでは確かにみられました。

慶応大学の考古学の教授であった清水潤三教授，この方は，蝦夷はアイヌであり，亀ヶ岡式土器はアイヌの製作したもので，縄紋時代の再末期は 7 世紀を遠くはさかのぼらないというような主張をしました。是川遺跡の報告書の中だったかと思われますが，そう書いています。

それから，座談会に出席していた江上波夫。江上波夫というと，戦後一世を博した騎馬民族渡来説で，日本の天皇家の先祖は，大陸からやってきた騎馬民族によって打ち立てられたんだという壮大な仮説を示しましたが，その騎馬民族渡来説を述べる時に，東日本や日本の外側の地方，ここには縄紋文化の伝統がかなり遅くまで存続していた，そして西日本の弥生式文化がそのままの姿では東日本に伝播しないというように発言をしておられました。だから，かなり後まで残っていたという考え方だということも，できるのかもしれません。

今や，私たちの年代を始め，そういう考え方を取る者は，おそらくいないと思います。

山内清男のその後というか，編年の成果・研究の成果なのですが，『日本遠古之文化』というシリーズを先程紹介しましたが，その中の「縄紋土器の真相」の中で「縄紋土器一般の無数の変化は，地方及び時代による変化の雑然とした集合である。我々はこのままを縄紋土器の姿だとは考え得ない。むしろ斯くの如き器物の羅列を一旦棄却しよう。そして，地方差，年代差を示す年代学的の単位，我々が型式と云って居るを制定し，これを地方的年代的に編成して，縄紋土器の型式網を作らう。この新しい基準によって土器の製作，形態，装飾を縦横に比較して土器の変遷史を作ることができるであらう。（中略）縄紋土器の文化の動態は，斯くのごとくして土器型式の細別，その年代，地方による編成，それに準拠した土器自身の変遷史，これによって排列されたあらゆる文化細目の年代的及び分布的編成，その吟味…等の順序と方面によって解明に赴くであらう。」と言っていまして，山内清男の文章というのは，しばしば行間を読まなければいけないという人がいるくらいで，結構難しい，もうちょっと優しく書いてくれればいいのにと思うことがあるくらいなんですが，このように書いています。

つまり，これは山内清男が縄紋文化研究の基本方針というのを，土器の型式学的な細分に基づくのだということを表明しています。これは机上の空論ではなくて，大正末年から昭和の初めにかけて，関東・東北・北海道において行われていた，いくつもの遺跡の発掘と，その資料に基づく膨大な研究に基づくものであるということは，言うまでもないのです。

そして，山内の編年研究の大きな成果の一つというのが，非常に短い論文なんですが，「縄紋土器型式の細別と大別」という論文です。これは，山内が東北帝国大学を辞めて，上京して，先史考古学会を立ち上げ，その先史考古学会の機関誌の一番初めの号に書かれたものです。この論文の中で，縄紋時代を，今まで甲野・八幡は，それぞれ，前期・中期・後期と 3 つに分けるということをして来たんですけれども，そうでなくて，山内は，その前・中・後の前と後ろに，早・晩の 2 期を設けて 5 期に区分する，5 期に大別することを提案します。

各地で見つかってきた細別型式，これを，それぞれ早・前・中・後・晩の各時期の中に当てはめるということをしていきます。非常に見事な編年表というのが発表されるわけです。

この編年表には，まだ型式名の書かれていないものがありますけれども，関東でいうと，一番上に三戸があって，一番下に安行の 3 というのがありますが，こんな編年表が出て来ています。

現在でも，ここに示された土器型式，編年の大筋は変わっていません。ただ，後に土器がさらに細かく分けられることが進んでいきましたり，新たな型式が追加されるといったことがあったりします。それから，また現在は，この 5 期区分でなくて，6 期区分になっておりますけれども，この事情については，またあとで触れることに致します。

山内の 5 期に分けるという区分，これは単に機械的に分けたのではなくて，既に見てきたような学史的な背景にも配慮しています。この頃一般化していた前期・中期・後期という 3 つに分けるというやり方に対して，中期に鳥居龍蔵の厚手式・陸平式と呼ばれていた土器をあてる。後期には薄手式・大森式を置く。前期には，厚手式よりも古いといわれる諸磯式やそれ以前の古式の土器をまず置きますが，「各期には」，各というのは，前・中・後です。「何程の細別があるかを考へてみよう。中期にはいずれの地方にも数型式しかない。これに反して，後期には十数型式がある。また前期にもこれに劣らない多数の細別型式があるのである。前期の土器は古式土器とも云われているが，その範囲は余りに広く，最古式とか本格的に古式とか云う注釈が必要な位である。自分は各大別も亦出来れば同数位の細別型式を含むものとしたいと思ふ。」つまり，前期とか中期とか後期とかという枠の中に入る型式の数を同じくらいにしたらどうかという方針を示します。

そして「この点を考慮してわたしは前中後に早晩の 2 期を補い，全期を 5 期に分かつことを提案したい。型式の数の余り多い所謂前期を早期（尖底を有する本格的に古い土器群）及び前期（広義の諸磯式とその並行型式）に分かち，又所謂後期を後期（所謂薄手式の範囲）及び晩期（亀ヶ岡式及びその並行型式）としたい。斯(か)くすると各期の細別型式は数型式或いは十型式未満となり，甚(はなは)だしい差等を見なくなるのである。」仮に，加曽利B1 式を作った人がそれを作っていた時間と，加曽利B2 式の土器を作っていた人のそれを作っていた時間とは大体同じと想定する，一世代くらいの感じ。どれくらいの年数になっているか分かりませんけれども，そうだったとすると今の加曽利B式は後期ですから，後期の型式の中に大体そういった型式が 10 型式くらいあるから，仮に 1 型式 30 年とすると後期という時期は 300 年くらいと考えられるじゃないか。

同様に，各大別，早期も中期も後期も大体同じくらいの型式の数が入るということは，各型式・各大別時間も同じくらいだというふうに考えられなくもないという考え方の基礎を作ってくれたんです。

これが，そのまま当てはまるかどうかは，別の話になるかもしれませんが，こういう具体的な年代まで考慮して，こういうことを考えたんだろうと。この論文に添えられているのが，この編年表なのです。

後になって，この編年表を発表した後，早期の土器の一番古い段階が関東地方では三戸式がありますけれども，これよりも古いものがどんどん発見されてきます。これは次回以降，取り上げますけれども，そうすると，この早期の幅が，また広くなってしまうんです。そうすると，先程言った「自分は各大別も亦出来れば同数位の細別型式を含むものとしたい」という方針から外れることになる。

そこで，山内は，後で佐藤達夫と共著で「縄紋土器の古さ」という論文を昭和 37 年に書いておられまして，その中で早期を二つに分けて早期の区分は，そのままにして，それより新しく発見された土器を草創期と名付けて，その編年表を発表します。

現在では，草創期の区分というのは受け入れられていまして，縄紋土器は，大きく草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と 6 期に区分して考えることが普通になっていますが，その草創期にもその後たくさん土器が出てきちゃっています。

研究が進めば進むほど，この型式というのはどんどん細かく分かれていきます。これは最終的には一個の土器が一型式みたいにまで，どこまで我々人間の手でやれるか分かりませんけれども，そういうところまで行ってもおかしくはないと思います。

型式学的な研究，土器を細かく分けていく究極の姿だと思うんですが，そこに意味があるかどうかは別にしまして，そうしていくと，型式学的な数は，後期，この図では関東地方の後期に，堀之内・加曽利B・同じく加曽利B・安行1，2とありますけれど，現在は，ここのところが，大まかに言って，この堀之内の前に称名寺式というのがありまして，称名寺式1式2式，それから，堀之内式も細かく分けられて1式と2式，それから加曽利B式は加曽利B1・B2・B3，その後に曽谷式という新しい型式が設定され，それから安行1式・安行2式という10の型式があります。

後期は，このように細かく分けられる。この後，私たちも含めてやってきたことは，この編年表をさらに細かく詳しくしていく，それぞれの地方でそうした作業を進めていくということが，縄紋時代の研究者たちの大きな仕事だった時期があります。現在では縄紋時代の研究というのが土器ばっかりやってきたということに対する反省と反動というところが，あるかもしれませんが，とにかく山内清男以来縄紋時代の研究というのが縄紋土器の研究だという時代が，長く続きました。

多分，レジュメに付いていると思うんですけど，細かいかもしれませんが，今日使った文献をリストにしてみました。山内清男の業績の紹介の1927年から10年くらいの文献を挙げてみました。現在の縄紋時代研究の大本というのが，この「ミネルヴァ論争」ということと言ってもいいのではないかと思います。

今日はレジュメが退屈なものだったのではないかと思いますけど，今日はこれで終わりにいたします。

（拍手）

司会：ありがとうございました。では質問等，受け付けたいところでございますが，お時間となりましたので，これで本日の第7回の館長講座を終了させていただきます。どうもありがとうございました。
次回，第8回のご案内をいたします。9月10日に『最古の土器の追究』と題しまして，同じく鷹野館長よりお話をいただきます。またぜひお越しください。
今日は最後まで，ご清聴ありがとうございました。